

随筆・評論

今井友子
藤本弘子
山口一選

特選

お疲れさま

日夏町
田中恵子

あと五分で始まる。私は左横の二人と後列の四人の様子を見やった。

(みんな、気楽にいいこうな)

今日は公民館の文化祭だ。これから私たちハーモニカサークルのステージ発表である。コロナ禍でこの一年、人前で演奏してない。去年も文化祭は催されたが、規模縮小で観客は十人ほどだった。今年は目の前に三十人以上が座っている。今年の会の代表になっている私は司会が当たっているのだ。

時間がきた。私はマイクを握った。

「みなさん、こんにちは。」

私達ハーモニカサークルは、月二回、この

公民館で練習しています。今日は秋をテーマになつかしい曲を演奏します。歌詞をお配りしましたので、一緒に歌って下さい」

繰り返し練習した最初の挨拶である。

「最初は『庭の干草』です。この曲は……」

と言いかけると、太郎さんが前奏を始めてしまった。(待つてよ、太郎さん) 私が曲の説明をしてから前奏に入ることになっているのに……。

彼は今年、米寿である。この後期高齢者ばかりのメンバーの中で、一番年上で一番上手である。無口だが、時折、長い顔をくずして冗談を言う。

彼の前奏に続いて、全員で歌の部分二回吹く。その後また彼の後奏となるのだ。太郎さんは、曲にふさわしく優雅にしっかりと後奏を吹き終えた。拍手が響いた。先程の行き違いなど私はすっかり忘れた。

(さすが太郎さんや、出だしよし)

私はマイクを手にした。

「次は『紅葉』^{もみじ}です。この曲はどの世代の人にも愛されています」

前奏は春子さんだ。自信なげな細い音が出た。彼女はいつも遠慮がちだ。今、一緒にサークルの役員をしている。脇役にまわって私を助けてくれている。歌の部分に入ると、会場から歌声が上がった。私たちはそれに乗って力強く吹くことができた。みんな大好きな曲だ。春子さんも後奏を元氣良く終えた。

「次は『森のかじや』です。これは大正元年の曲で、軽やかな楽しい曲です」

夏子さんの出番だ。ところが前奏がいつこうに始まらない。秋子さんが「あんたやで」と小声で促している。「えっ、私か」という声も後ろから聞こえてくる。夏子さんはここ二年ほど物忘れが目立ってきている。ハーモニカ歴は長く、私は、太郎さんの次にこの人が上手いと思っている。演歌が好きで、楽譜を見なくても演奏できる曲がいくつもある。

前奏が流れた。六人が続いた。リズムカルに元気に調子良く吹くことができた。「後奏、後奏」とまた秋子さん。「あつ、そうか」と夏子さん。夏子さんは慌てることなく後奏に取りかかった。大きい拍手をもらった。

四番目、五番目と続いて、六番目の曲は

『野菊』だ。ここでまた太郎さんだ。彼だけが二曲受け持っていた。

「昭和十七年の作品です。戦時中に作られた歌とは思えない、清楚で気品ある曲です」

今度はちゃんと私の説明を待っていてくれた。美しい旋律が流れ、みんなで後に続いた。私の大好きな曲だ。吹いていると幸せになる。

「次は『りんご村から』です。ここで初めて歌謡曲を入れました。三橋美智也の歌です」

前奏は次郎さんである。体格の良い愛想のいい人だ。彼は七人のメンバーの中で一番の新米だ。次郎さんは落ちついて吹き出した。(上手や、次郎さんは本番に強いな)

六人も気持を込めて曲に入っていくことができた。

「最後の曲になりました。『四季の歌』です。昭和五十一年の作品です。今も多くの人に愛されています」

この曲の前奏は冬子さんだ。いつも冷静で的確なことを言ってくれる。卵型の顔の美人。ハーモニカの音が正確で気持がいい。七人全員で心を合わせて吹いた。無事に終わった。

別室でハーモニカを片づけた。お調子者の私は黙っていられない。

「次郎さん、よかったわ」

「わし、この一週間、毎日練習したでな」

(努力したんや、本番に強いなんて思ってたもん、私は挨拶の練習ばかりしていたな)

冬子さんが一言。

「みんな、よかった」

駐車場で夏子さんがうろうろしていた。

「私の車、どこやったかな」

「今日は私の車に乗ってきたんやで」

秋子さんはそう言いながら、夏子さんのためにドアを開けた。秋子さんはこのサークルの一番の古株だ。いつも仲間の一人一人に気を配っている。二人が乗り込んだ。私も春子さん、冬子さんもそばに寄って二人に手を振った。自転車の太郎さんも軽トラックの次郎さんもちろを見ている。二人にも大きく手を振った。「お疲れさまでした！」私は地声を力いっぱい張り上げた。(終わり)

(文中の名前はすべて仮名です)

(評)

読者を惹きつける軽快なリズム。ユーモアと優しさが満ち溢れている作品である。個性豊かなメンバーの人間模様。演奏描写と選曲理由など、作品全体の構成も良い。作者の思いを詰め込んだ題名に、インパクトを感じた。

入選

栗二題

米原市
田中 繁男

私昭和十六年生れの八十二歳です。

今いただきものの中国産、甘栗を食べています。この栗はこの産地か、どのようにして作られて採栗されたのか、どのようなルートで日本に入り加工されたのか、自家製のお茶で甘栗をかみしめていると、子供のころの栗の思い出がよみかえってきます。

○その一 背戸の栗の木

家は農家で田の字形の家でした。そして、はなれ、作業用小屋あり、同じ敷地内には自家用野菜が少量多数作られ、その反対の地はカキ、ビワ、ブドウ、グミ、ザクロ、ナツメ、ユズ、ウメ、さらに摘心もされず空にむかつて自由にのび枝も広がる、大きな栗の木がありました。

その思い出は、童謡「里の秋」に歌われている、叙情歌そのものでした。

十月上旬になると栗の実の色づき、家の中にいても実の落ちる音が聞こえ、早朝からの

栗をひろいました。さらに色づく父親が長い竹竿で下から、そして木に登って落してくれました。それを兄妹三人で集め、色づいた実は木鎌で取り出し、色づかないイガはそのままで、古いカマスに入れ、水をたっぷりかけ、同じように二日目、三日目も水をかけました。三日目の夕方になるとイガを取り出し鎌で実を出しました。白かった実も茶色に変っていて、ムシロで乾燥です。そして製材所へ行きミカン木箱いっぱい、オガ粉をもらってきて、水とねり合せダンゴ状になるように、水分調整、ミカン箱に栗とオガダンゴを埋めこんで保存しました。十二月になると栗を取り出し、キリで小穴をあけて煮て、あつたかいうちに家族全員で食べました。その後は子供のおやつに、一番の楽しみは栗の皮をむき、火鉢の中で焼く栗でした。炭火の近くの灰の中に埋めた焼栗です。栗の大小、水分、火力等で焼きぐあいも変りうまう焼けた時の味は格別で至福の時でした。又落葉はかき集め畑の肥料に、そしてイガ部も集めて乾かし、当時の風呂の五右衛門風呂の燃料に利用、イガはリング木箱に入れてあり風呂が沸く前に、十能ですくって二、三杯くべます。火力は弱いですがゆつくりとした燃でしたが、火持ちは良かった、当時は栗の木のめぐみ全部を使いこなしていました。

○その二 山栗採り

当地方の田んぼは平地も棚田もあり、棚田は山沿に、この山は自家用燃料のために田んぼの近くは雑木で、その中に山栗の木もあり十月初めになると栗は早生、晩生等ありましたが、栗は色づいてきます。我々子供にとつての楽しい栗採りの季節がやってきました。土日曜の午後、子供らは三人一組になり木鎌を手にして農道へ、そこから山を見て山沿いの栗の木の多い所へ向います。そして初めに栗の木をゆすつて実を落します。自然に落ちた栗は小動物に食べられています。そして一人が木に登り中ほどから木にぶらさがると、木は弓なりになり下方へ、その時他の二人はすばやく鎌で栗をたたき落します。しかし見込みちがい空中にぶらさがったままの時もあり、その時はすぐに幹に少しずつ鎌で切り込みを入れて曲げます。この木にぶらさがる事を「ターザン」と言っていました。落した栗はその場でイガを足先で踏み、鎌を使って実を取出します。これらを数回くり返すと、各人のポケットはふくらんできた農道へ、そこで栗を出し集め、ジャンケンで順番を決め一個ずつ取ってわけました。皮のかたい栗は小刃「ひごのかみ」を使ってむき、渋は親指の爪先で取り口の中へ、食べる時のポリカ

でした。

このような事は今知る人も少なくなってきました。子供のころの遊びとおやつ両方の楽しみでした。今だったらあぶない危険だ山を荒すなどと言われると思うが、当時はなにもなかった。

(完)

(評) 何と優しい文章なのかと、とても驚いた。作者のありのままの素直な思いに、自然と引き込まれたからだ。子どもの頃の栗の木の記憶が、丁寧に綴られていて、読みながら、学ぶことも多かった。貴重な作品だと感心した。

入選

折々に伊吹山

平田町
伊藤 眞雄

折々に伊吹を見ては冬ごもり
元禄四（一六九一）年、最後の江戸下向の折、松尾芭蕉が大垣で詠んだ句である。伊吹山の麓で雪に覆われた地域の様子を、「冬ごもり」という言葉で見事に象徴していると思われる。

伊吹山の麓で生まれ育った私には、この句と共に伊吹山との思い出が浮かんて来る。

小さい時は、裏庭の斜面を竹スキーで滑ったり、兄達と「かまくら」を作ったりして遊んだ。

中学校では、冬に伊吹山一合目でスキーをし、夏に夜の伊吹山でヒメボタルを見て、星空の下で懐中電灯を頼りに頂上を目指した。朝明けの御来光が鮮烈に浮かんてくる。

高校に入り、長浜から自転車で帰る途中のことであつた。青空の下、一面が田畑の所にさしかかった時、ふと前方を見た。伊吹山は私を見るかのように悠然と佇んでいた。

「ああ、伊吹山って、こんなに美しく雄大だったのだ」と呟いた。遠くに見たからこそ、その勇姿が分かつたのである。一三七七mの頂から両側に広く下る滑らかな稜線をもつ、その山の姿に魅了された。さらに、伊吹山の鷹揚な姿に励まされることも何度かあつた。

大学進学、就職、結婚による転居で伊吹を離れたが、二十年后に伊吹山の裾にある小学校に勤務できた。

その学校での朝、子ども達は前庭で「お早うございます」と登校班ごとに元気な声を出し、一斉に礼をする。その様子が職員室から見える。ある先生が私に言った。

「伊吹山に挨拶をしているのですよ」と。

「山と仲よく」の行事で、全校児童が一合目まで歩き、ゴミ拾いをしてから遊んだ。昼食後、山の伝説、山を舞うイヌワシ、山に咲く花等の話を年ごとに地域の方から聞いた。

冬には三年生以上の児童がリフトに乗り、一合目で地元の人と共にスキーを楽しんだ。地域の人のつながりを大切に感じた十一年間であつた。

その後、南の学校へ異動し、さらに、退職後には彦根へ住居を移して九年が経つ。

昨年春、米原市教育委員会の高橋順之氏から『伊吹山風土記』なる著書が届いた。そこには牧野富太郎と伊吹山に関する詳述があつた。牧野は植物分類学の創始者として有名で、NHK朝ドラマのモデルになつてゐる。

牧野は、伊吹山に八回も登つてゐた。山の植物の豊富さに驚き、そこに咲く花を愛していたことが分かる。また、地域の人々との深いつながりがあつたことも記されている。地域の人の温かさとともに、牧野の誰にも優しい鷹揚な人柄が伝わってくる。

ところが、昨年七月十二日のニュースを知つて驚いた。激しい豪雨により土砂崩れが起き、伊吹山の登山道が閉鎖されたという。

私は、伊吹山に会いたくなつた。娘に話すと、夏休みに娘夫婦の家族と共にドライブウェイから伊吹山へ行く計画を立ててくれた。

七月二十二日、娘たちが私を誘つて、車で伊吹山の九合目に着いた。朝十時、既に多くの自動車が停まつていた。幸い、雲は少なく、外気は涼しい。

山道に入り、砂利道を一步一步と踏みしめながら歩いた。鶯の声が夏を忘れさせる。ようやく山頂へ着き、日本武尊の像の下で写真を撮つた。近くの椅子に座り、みんなで休憩しながら下界の景色を一望した。

その後、私は周辺を歩いたが、かつてきれいに咲き誇つてゐた花畑が見つからない。四方が鉄柵の中で、手作業で黙々と除草をしておられる方の一人に、意を決し話しかけた。

「ご苦労様です。たしか、こちら辺に花畑があつたように思うのですが」。

「ここが花畑やつたんや。今は山によおる百匹もの鹿があちこちの草花を食い荒らしよるさかい、こんなになつてしもうた。ほんで、鉄柵で囲み、もつぺん元に戻そうとなぶつとるんよ。登山道の土砂崩れも鹿のせいや」と懐かしい訛りで、嘆息を込めて話された。「ひどいことでしたな。お疲れないように。気持ちだけです」と言い、募金箱に金を入

れようとする、その財布ごと入れてかまへんで」との冗談に思わず笑ってしまった。

その後、中学校の同級生夫婦が経営している山小屋で昼食を取った。あいにく主人はおられず、奥さんと昔の思い出に話が弾んだ。

帰り際、花畑が見られずに寂しい思いがしたものの、今も変わらずに温かく接してくれる地域の人々と出会えたことに心が和んだ。

その後のニュースで米原市と滋賀県とが協力して登山道や花畑の復旧に力を入れ、来年春には登山道が開通する計画であるという。

この冬、私は古希を迎えることができた。老いを感じつつも、幸い足腰は丈夫である。

時代や自然の大きな変化を受け入れつつ、散歩がてら折々に伊吹山を遠くに眺めている。

(完)

(評)

伊吹の山麓で生まれ育った作者が、共感する芭蕉句から思い出した日々は、雄大な山への敬愛であった。時代とともに変化する伊吹山を、自身の老いと重ね、受け入れ続けようとする力強さに感動し、ほのぼのとした。

佳作

秀策の墓を訪ねて

普光寺町

溪

流

佳作

ついうっかりして

大藪町

脇坂修身

佳作

「曾ばあば」になった

後三条町

江畑民子

《総評》

本年度の応募数は十三作で、昨年より少し多くなりました。また、二作投稿してくださった方もあり、敬意と感謝申し上げます。

日常の中で、随筆・評論を書こうと思われた時、作者「私」にしか書けない何かを、もう一度探してみてください。それは、遠い記憶の中にある、貴重な体験やほんの一瞬の偶発的な出来事の中に潜んでいるかもしれません。そして、記憶もまた、何かがきっかけとなって思い出すこともあると思います。

読者もまた、そうした作品の中から新たな発見をし、気づき、作者の感動を共感できるのだと思います。

今回の選考では、規定枠をオーバーした作品があり、良い作品でありながら、残念に思いました。また、個性が光る優秀な作品に、選考は難航し、僅差の結果となりました。

どうか、多くの皆さまが、今後も応募してくださいよう、心から願っています。

藤本弘子